

男子部

「男子部中等科・高等科合唱」

武田若菜

I. はじめに

学校全体として、どの教科でも自主性を育む教育を進めている。音楽会でもこの課題を念頭に置きながら、感性教育と人間教育の部分とを、バランスよく学べるよう心掛けた。

II. 男子部全員合唱

1. 準備と経過

例年であればリーダーの選出が終わり選曲の段階になると、教員から音楽会で歌ってほしい曲の2曲程度を提示し、どちらが良いかコーラスリーダーを中心に、高等科3年生のクラスで意見を聞き、最終的には教員が決めていた。しかし、まずこのやり方を変えることにした。

昼食時に、リーダーから男子部全クラスに対して、歌いたい曲のリクエストを出してもらった。選曲の条件として、男声四部のコーラス譜があることと、歌詞の内容が音楽会で歌うに相応しいものであることをあげた。何曲か候補曲が出揃ったところで毎日1曲ずつ録音されたものを聞き、歌詞を見て内容を吟味した。最終日には一人1票で投票し、信長貴富 作曲、一倉 宏 作詞「こころようたえ」に決定した。

5月頃からクラス毎に音楽の時間を使って、少しずつ練習を進め、11月からは6学年合同の練習4回を経て本番に臨んだ。

「こころようたえ」の歌詞の内容が生徒たちの身の丈にあったものであったため、気持ちを旋律に乗せやすかった。今年の中等科1年生は変声期を迎えていない生徒も多く、高等科生の中には音色の違いに違和感を感じた人もいたようだが、それはそれで中高の6学年で精一杯歌っている感じがよく伝わった。さびの部分は細心の注意を要したため、当初は高等科生のみで歌う予定にしていた。テナーの高音のソロは、きれいに出すことが難しいため、グリークラブで練習を重ねている人

が担った。6学年合同練習の初日、やる気のない態度の人が皆無とは言えず、和音が定まらないので、更にだらける人も出てくる状態であった。しかし、ハーモニーが整ってくると、生徒たちは「自ら歌おう」という目の輝きを見せ、高等科3年生から歌い方について注意喚起の声が挙がるなど、当事者意識が見えてきた。

2. 本番当日の様子

男子部史上初めて、6学年が一緒にアカペラに挑んだ。第一声「こころよ」の歌い方で全てが決まる緊張を乗り越え、本番は最後までみんなが集中して歌うことができた。正しい音程を作り出すには、その音程のイメージを持っていること、そのイメージの音を方々の筋肉に伝え、声にすることが必要である。一音出すだけでも、体も頭もフル回転の作業である。その上、和音にするためには、他の人の声を聞いて微調整しなければならず、更に大変な作業となる。しかも、その歌詞に相応しい音色や強弱なども同時に考えながら歌うのだから、合唱することは何と頭脳を使い身体を駆使する作業であろう。心から歌っているときの表情はどの人も生き生きと輝いていて美しい。最後のハーモニーが会場に響き渡り、割れんばかりの拍手が会場を包んだ。

III. 男子部中等科コーラス

1. 準備と経過

準備は2年前から始まっていたが、その時から「いのちのうた」という曲が候補に挙がっていた。この曲はポピュラー曲を手がける竹内まりやさんが母親となってから作詞したもので、詩の中には新しい命を慈しむ温かな眼差しが溢れている。そして我が子を育てる中で見えてきた自分の親への感謝。中学生がこの詩に込められた思いをどこまで理解し、自分の言葉として表現できるか、大き

な挑戦であったが、感じるままを素直に曲に乗せることを大切に、一回一回の練習に臨むことにした。

もう一曲は、イギリスの作曲家ベンジャミン・ブリテンによる「キャロルの祭典」より“**This little babe**”。今年は中等科1年生に意欲的なボーイソプラノの生徒が何人もいたため、中等科男子でしか出せない響きを大切に、愛と正義のために戦う使命を担って生まれてきたイエス・キリストを思いながら歌えたら良い、と思い選曲した。この曲は4番まで全て歌詞が英語であることに加え、1番は斉唱だが、2番からは一拍遅れのカノンであるために、乗り遅れると復帰が難しくなること、発声面でも気を抜くとハーモニーが成立しなくなる等が難しい点であった。

中学生だけで同声四部に取り組むことだけでも大きな挑戦であるが、更に「いのちのうた」と「こころよ うたえ」も歌うことになっていたため、新入生にはかなり覚悟が必要であった。1年生、2年生には2学期から毎朝、生徒のリーダーが中心となって、英語歌詞のリズム読みをしてもらった。クラス担任にもパワーポイントで歌詞を映し出してもらうなど協力を頂いた。誠実に毎朝の練習を続けた1年生において、その効果は絶大であった。11月に入り一早くクラス全員が暗譜で歌えたのは1年生であった。

2学期半ばから毎週のように3学年合同の練習も行われたが、リーダー学年である3年生は他学年より授業時間が半分しかないことで譜読みも遅れ、やる気を削ぐきっかけにもなったと思われる。毎回の練習の到達点を板書し、出来たら丸をつけ達成感を促したが、歌えていない人たちにとっては逆効果であった。中等科総リーダーは皆に一生懸命働きかけてくれたが、練習時間数の獲得によって徐々に歌える自信をつけさせることが、やる気を引き出す一番の近道であったようだ。また、リーダーの生徒と授業毎の打ち合わせや振り返りにもう少し時間を割くべきだったと反省している。

中等科合同の授業は、3年生のリーダーを中心にまとめる努力をしてもらった。上級生のリーダーたちの姿を見ている下級生は、憧れも手伝い、1年生だけの授業において、クラスリーダーが教員の代りに授業をリードすることもできた。

1. 本番当日の様子

本番1週間前、学内全体が音楽会モードになる中、気持ちに向かなかった生徒も、流石に顔つきが変わってきて、指揮者の意向が抵抗なく伝わるようになった。この頃やっと、歌詞の意味を味わい出す者もいたが、皆の歌詞に込める想いが、自然な流れを生み、よい響きで歌うことも意識し始めた。「キャロルの祭典」は中等科2年の生徒が、「いのちのうた」は女子部の先生が伴奏を担当し、全員で精一杯の合唱をすることができた。

聴いてくださった父母やお客様の感想からは「歌詞が心に届いてきて泣きそうになった」「高い声が特に綺麗であった」「一生懸命に歌っている姿に胸が熱くなった」などの言葉をいただいた。

生徒自身からは「歌っていて気持ちよかった」「拍手をたくさんもらえて嬉しかった」「はじめからもっとちゃんとやればよかった」など、経験できたことの感動を記す生徒が多かった。一方で、各クラスともに「本番のリハーサルでは待ち時間が長くて疲れた」と書いている生徒もいた。

IV. おわりに

近年、男子部の音楽の授業は落ち着いてきている。故に発声の基礎も1年生のうちから指導できる。しかしその一方で、男子には必ず変声期があり、自分の思うように声を出せないことで気持ちが乗らず、みんなで音楽を創っていくことに興味を持たなくなってしまっている生徒がいる。希望を持てるような丁寧な説明と、個々の生徒への対応の大切さを痛感した。なお、授業時間数の件では教員側の目算の甘さが、中等科3年生リーダーに必要な以上の負担をかけたことは否めない。来年度からすぐに見直しを行いたい。

中高合同の合唱では、上級生が下級生に対して良い手本になろうとする意識が働いて、以前よりも少ない練習回数で曲をまとめることができた。中等科だけの演奏も、6学年合同の演奏も最後の1週間ようやく曲が自分のものになってきたようで、授業以外の時間でも歌っている姿が見られた。本番では、食い入るように指揮者を見ながら体を揺らして表現している生徒たちの姿に、胸が熱くなった。